推薦者：五十嵐悠紀

塚本昌彦
神戸大学

# 私のウェアラブル生活

明治大学の五十嵐悠紀先生より，私のウェアラブル生活の始まりからその反響等についてを語ってほしいということで指名されましたので，今回はその話をします．

私は2001年から今に至るまで，研究の一環としてウェアラブルデバイス，特にHMD（ヘッドマウントディスプレイ）を装着して生活しています．当初は装着姿がかなり奇異だったので，つけるには勇気がいりましたし，大学の教員としてどうかなど，いろいろな観点から判断して決心しました．図-1に当時の写真を示します．

まだ誰もやっていなかったので，機器の構成では少し苦労しました．パソコンにHMDをつなぐのにカード型のコンバータと乾電池の電池ボックスを使い，それらを本体の裏にテープで固定したり，軽くするためにパソコンに元々ついていた液晶ディスプレイを外したりしました．ずっと使うために日ごろのメインマシンをこれにしたために，夜中にちょっとスケジュールを確認するのにもプログラムや文書を書くのにもHMDをつけないといけなくなった点が不便でした．ほかにも，ドアノブに線が引っかかるとか，機器の故障・破損が多いなど，いろいろな不便を見つけて，後の研究に活かしました．たとえば，ウェアラブル専用のWメールシステムや両手に指輪型デバイスをつけて文字入力をするシステムなどを考えたのですが，これらの経験が活きたのだと思います．

一方で予想通り外部の反響は大きく，会う人にはほとんどみなに「それは何か」「何のためにそんなことをしているのか」などと尋ねられました．なかでも，見た目が奇異なので近寄りがたいというのが多くの人の反応でした．そこで，自分自身のファッション性を高めることでウェアラブルデバイスをやや目立ちにくく，よりファッショナブルに見せられるのではないかと考え，金髪・カラコンにし，ひげを生やし，服装もできるだけおしゃれな感じに変身しました．図-2が変身後の私の姿です．

この戦略が功を奏したのか，1カ月もしないうちにWebニュースなどのメディアで紹介されるようになり，さらにそれをきっかけに雑誌や新聞，テレビなどの取材，講演などが多数舞い込むようになりました．さらにその後，いろいろな人が私の周りに集まってくるようになってNPOを立ち上げたり，拠点を神戸に移してさまざまなイベントを行ったりしてきました．結果的に15年以上にわたってウェアラブルの推進活動をしてきたことになります．

予想外なことに，いまだに私以外にHMDを日常生活で常に装着している人はほとんど見かけません．それでも私は，「1年後には街の中で多くの人がHMDをつけるようになる」と言い続けています．それが実現した暁には，ぜひ皆さんにもっと詳しい私の苦労話やノウハウを聞いていただきたいと思います．

紙面の都合上私のお話は以上ですが，ウェアラブルの推進活動はもしかしたら関東で進めたほうがうまくいったのかもしれません．そこで次回の本リレーコラムは，関西から関東に拠点を移して研究活動を進めておられる国立情報学研究所の坊農真弓先生に，関西と関東の研究環境の違いについてお話いただきたいと思います．お楽しみに．

図-1　装着当初の筆者の様子・2001年

図-2　ファッション性を高めようとしていろいろ工夫した結果